

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520089

研究課題名 (和文) 古典的文芸作品にみられる音感覚についての比較美学的研究

研究課題名 (英文) Comparative Aesthetic Studies on the Sound hearing found in Classical Literature

研究代表者

原 正幸 (HARA MASAYUKI)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：10092305

研究成果の概要 (和文)：

日本人の音感覚、特にある種の自然音 (例えば、風の音、虫や鳥の鳴き声等々) に対する感覚には季節との繋がりを感じ取るというような独自性が見られることがしばしば指摘されて来た。その原因として既に四半世紀以上も前のことになるが、大脳生理学者角田忠信によって大脳機構説、即ち西洋人の場合そのような自然音は雑音として大脳の非言語半球において処理されるのに対して日本人の場合は有意義な音として大脳の言語半球において処理されるという特異性の存することが科学的に実証されることが主張され、この解釈は世間にも広まることになった。しかしながら、この大脳機構説は当時小学生であった彼の子供には当て嵌まらなかったという彼自身の証言がヒントとなって、本研究代表者はある種の自然音に対する日本人の嗜好は大脳の機構の特異性によるものではなくて、文芸的伝統によって培われ間主観的に形成されて来た文芸的美意識によるものであると考えるに至った。本研究ではこの考え方を古典的文芸作品に基づいて実証すべく、「万葉集」、「古今集」を始めとする和歌集、「源氏物語」全五十四帖および「平家物語」、松尾芭蕉全発句および紀行文「奥の細道」等々のような日本の代表的な古典的文芸作品における音感覚を精査・分析することを通じて、日本人の音感覚の独自性は文芸的な美意識の伝統と、家屋の構造および生活形態 (旅、隠居、男女の離別等) によって育まれてきたものであることを解明した。

研究成果の概要 (英文)：

It has been indicated that there is a peculiarity in the Japanese sound hearing, especially about natural sounds such as sound of wind, chirps of cricket, notes of birds etc. It was asserted ,more than a quarter of century by brain physiologist Tadanobu TSUNODA that this peculiarity derives from the Japanese brain mechanism:in the case of Westerners, the natural sounds are heard as noises in the non-linguistic hemisphere of brain,while in the case of Japanese,they are heard as meaningful sounds in the linguistic hemisphere of brain.. His assertion was scientifically proved ,and became supported by people. But given hint by his own saying that his assertion had no validity for his child, I reached the conclusion that the Japanese peculiarity of natural sounds hearing depends not on the auditory mechanism of brain, but on the Japanese literary aesthetic sense which has been traditionally and intersubjectively formed by Japanese. Our studies elucidate, analyzing the sound hearing found in classic literary works including Manyoshu, Xokinwakashu, Genjimonogatari,, Heikemonogatari,, Matsuo Basho's poetry works, that this peculiarity has been formed by the tradition of the literary aesthetic sense, the traditional structure of house and the life style e.g.journey..

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：音感覚、自然音、聴覚世界、文芸的美意識

1. 研究開始当初の背景

日本人の音感覚、特にある種の自然音（小鳥や秋の虫の鳴き声、風の音、水の響き等々）に対する嗜好には独特のものがあることがしばしば指摘されて来た。約四半世紀前に大脳生理学者角田忠信氏によってこの音感覚の特異性は日本人の大脳の機構の特異性、即ち西洋人の場合そのような自然音は雑音として大脳の非言語半球において処理されるのに対して日本人の場合には有意義な音として大脳の言語半球において処理されるという特異性の存することが科学的に実証されることが主張され（「日本人の能-能の働きと東西の文化」1978年）、この解釈は日本文学、音楽美学、比較文化等の分野から注目されるようになり、次第に世間にも広まることになった。

しかしながら、この大脳機構説は当時小学生であった彼の子供には当て嵌まらなかったという彼自身の証言がヒントとなって、本研究代表者はある種の自然音に対する日本人の嗜好は大脳の機構の特異性によるものではなくて、文芸的伝統によって培われ間主観的に形成されて来た文芸的美意識によるものであると考えるに至った。そのことを確認するために、ある種の自然音（小鳥や秋の虫の鳴き声、風の音、水の響き等々）と音楽（雅楽）が互いに他を排除することなく共存し響和し得るものとして描かれている「源氏物語」全五十四帖における多種多様な音感覚を精査・分析によって論文「音楽と自然—源氏物語の聴覚世界—」（エリザベト音楽大学研究紀要 II、1982年、pp. 21-32）を發表し、以来「古事記」「古今集」「源氏物語」とほぼ同時代に書かれた音楽小説「宇津保物語」に関しても同様の研究に着手した。

この意味での特異性は、既に述べたように、根本的には間主観的に形成されて来た美意識、特に和歌や俳句等の文芸によって培われて来たものであると言わなければならないが、この文芸的美意識の伝統は現在では急速に衰退し始めている。事実、第二次世界大戦後の生活様式の欧米化、ジェット機や自動車の飛躍的増加による騒音の増大化、住居の密室化（マンション、アパート等の鉄筋コンクリート、アルミサッシ窓の住宅）に住み、古典文学とは疎遠になった現代の都会人からは伝統的な音感覚はもはや失われつつあるというのが現状である。

2. 研究の目的

従って、本研究は平成 18 年度から平成 21 年度までの 4 年間をかけてこの自然音に対する嗜好と美意識が伝統的に文芸によって育まれて来たことを、日本の主要な古典的文芸作品における音感覚の精査・分析を通じて解明することを目的とする。そして古典的文芸作品における音感覚が古代、中世、近世とでは歴史的にどのように変化して来たのか、また歴史的に観ても変化しない面があったのかどうか、を追跡調査すると同時に、その問題が伝統的な文芸的美意識の衰退しつつある現代の日本の文化的状況にとってどのような意味を持つのかということと比較美学的に考察する。

3. 研究の方法

「古事記」、「万葉集」「古今集」を始めとする和歌集、「源氏物語」、「源氏物語」とほぼ同時代に書かれた音楽小説「宇津保物語」、当初は平曲として琵琶の伴奏付きで語られていた「平家物語」、松尾芭蕉全発句および紀行文「奥の細道」等々のような日本の代表的な古典的文芸作品における音感覚を精査し、音感覚についてのすべての記述をその前後の文脈と、作者または登場人物の心理状態、美意識との関連において分析する。

松尾芭蕉「奥の細道」に関しては、現代の聴覚的世界との異同を確認するために、裏見の滝（日光）、仙台、多賀城、塩竈、第一の主要訪問地である松島、立石寺、最上川、出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）、鶴岡、酒田、第二の主要訪問地である象潟等を実地調査する。

さらに、中国古代の民謡の歌詞をジャンル別に収録した「詩経」や、現在でも一般に親しまれている「唐詩三百首」の母体である「全唐詩」を可能な限り参照し比較することにより、日本人の音感覚と美意識の独自性と呼べるようなものがあるかどうか、という問題についても検討し、可能な限り中国の専門家とも意見を交換する。

4. 研究成果

(1)「源氏物語」は音楽との関係の深い文芸作品として古くから知られている。そこで注目すべきことは、音楽が演奏されている時その周囲で発生しているある種の自然音（風や

波の音、小鳥や秋の虫の鳴き声等々)と音楽とが互いに排除し合うことなく共存し、響き合うものとして描かれている。しかしながら、そのような場面を仔細にけんとうすると、音楽と自然音の共存は単純に聴覚レベルで成立しているというより、構想力によって再構成されたレベルで成立している性格の強いことがあきらかになった。これと同様のことが芭蕉の「奥の細道」の聴覚世界についても言え、本研究社の行った裏見の滝(日光)、仙台、多賀城、塩竈、第一の主要訪問地である松島、立石寺、最上川、出羽三山(羽黒山・月山・湯殿山)、鶴岡、酒田、第二の主要訪問地である象潟等の実地調査、「奥の細道」紀行に同行した弟子の記した「曾良日記」の仔細な検討からも裏付けられる。

(2) 本質的に雑音、非楽音を排除する西洋音楽の場合とは異なり、日本の伝統音楽においては雑音、非楽音的要素を排除しないばかりか、能管の「ヒシギ」、三味線の「サワリ」、尺八の「ムラ息」等のようにむしろ積極的にそのような要素を取り込もうとする傾向がみられるが、これはあくまでも音色にたいする嗜好であって、自然音に対する嗜好とは別物であることが判明した。

(3) 日本の古典的文芸作品においてはしばしば「風」が音楽を運ぶものとして重要な意味を持つ。場合によっては、風によって運ばれて来た音楽が隔てられていた男女を結びつけるに至るというパターンが存する。

(4) 虫の鳴き声に対する音感覚に関しては、文芸史上西行(「山家集」)が特異点であることが判明した。

(5) 芭蕉の全発句の精査を通じて、ホトトギスの鳴き声に対する嗜好が際立っており、旅行中は雨・風のおとが、また江戸滞在中は様々な生活音が詠み込まれているという特徴のあることが明らかになった。

(6) 研究成果報告書として紙媒体の「音感覚と美意識」(A4版、総ページ数153、印刷広大生協、2010年3月)を刊行し、論文6点と併せて資料集「源氏物語の音感覚」および「松尾芭蕉全発句における音感覚」を収録した

「音感覚と美意識」の目次と概要
はじめに
<論文>

1. 原正幸: ページ
音楽と自然-「源氏物語」的聴覚世界- (1)
(概要) ある種の自然音(小鳥や秋の虫の鳴き声、風の音、水の響き等々)と音楽(雅楽)が互いに他を排除することなく共存し響和し得るものとして描かれている「源氏物語」全五十四帖における多種多様な音感覚を精査・分析して発表した旧稿「音楽と自然-源氏物語の聴覚世界-」(エリザベト音楽大学研究紀要 II、1982年、pp. 21-32)の中国語

訳。本研究の原点でありまた本研究に関して中国の音楽学者・音楽美学者の批判意見を問うために収録。

2. 原正幸:
音楽と自然環境-「源氏物語」若菜下・住詣の段- (16)

(概要) ある種の自然音(小鳥や秋の虫の鳴き声、風の音、水の響き等々)と音楽(雅楽)が互いに他を排除することなく共存し響和し得るものとして描かれている「源氏物語」においてもとりわけ印象的な場面の一つ「若菜下・住詣の段」に関する考察。海岸にあった住詣神社に光源氏一行が詣でて「東遊び」を上演した時の、波の音や松風との響和が主題。

3. 原正幸:
「音楽を通じての男女(夫婦)再会譚」の起源-山田流箏曲「小督」を例に一 (24)

(概要) 「平家物語」小督で高倉帝の命を受けて嵯峨野に隠居する小督の局を、仲國が風に乗って聞こえて来る事の音を手掛りに捜し当てる話の源流が「源氏物語」賢木の「野の宮」に遡ることを解明。この型の話はさらに中国古代の「聴歌認妻」の故事にまで遡る可能性を指摘。

: 4. 原正幸:
詩人の音感覚と音楽性-松尾芭蕉「奥の細道」の聴覚世界の一断面- (32)

(概要) 「奥の細道」小松・多賀神社の句「むざんやな甲のしたのきりきりす」に詠み込まれたギリギリス(現在のコオロギ)の鳴き声の持つ意味について、「万葉集」、西行「山家集」、さらに中国の古典「詩経」における虫の声と比較することを通じて、芭蕉の句の特異性と独創性を明らかにした。

5. 周耘:
「水陸法会」の演劇的特徴 (39)

(概要) 省略
6. 「スコラ・ピロム-ソールム」第III部修道士ウオイの遍歴 (66)

(概要) 省略
<資料集>
原正幸:
資料集(1)「源氏物語」の音感覚 (91)
(概要) 「源氏物語」全五十四帖に登場する多種多様な音感覚についてのすべての記述を精査し、分類を試みた。
資料集(2) 松尾芭蕉全発句における音感覚 (142)

(概要) 松尾芭蕉全発句に登場する多種多様な音感覚についてのすべての記述を精査し、ホトトギスの鳴き声か際立って多くよみ込まれていること、江戸市井における日常生活と旅行中とでは音感覚の対象となるものに違いのあることを指摘した。以上

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(1) 雑誌論文 (計2件)

- ①原正幸: 詩人の音感覚と音楽性-松尾芭蕉「奥の細道」の聴覚世界の一断面-、第8届中日比較音楽国際学術研究会論文集、査読有、(巻数ナシ) 2009、33-36
- ②原正幸: 「音楽を通じての男女(夫婦)再会譚」の起源、第7届中日比較音楽国際学術研究会論文集、査読有、(巻数ナシ) 2007、361-365

(2) 学会発表 (計2件)

- ①原正幸: 詩人的音感覚与音楽性-松尾芭蕉「奥州小道」之聴覚世界的一个断面-、第8届中日比較音楽国際学術研究会、2009.9.12、中国江蘇省南京師範大学
- ②原正幸: 「通過音楽重逢情人(愛人)故事」の源流、第7届中日比較音楽国際学術研究会、2007.9.8、中国湖北省武漢音楽学院

(3) 図書 (計1件)

- ①原正幸 大学教育出版 「スコラ・ピロムーソールム」2010 (印刷中) 総ページ数 197

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 正幸 (HARA MASAYUKI)
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号: 10092305

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: